

八幡平いにしえの宝

(市内の貴重な文化財や自然などを紹介します)



フクジュソウ (福寿草)

フクジュソウはめでたい花として、園芸種は正月用盆栽に松や竹、梅などの寄せ植えとして古くから重用され、もっとも関心の高かったのは江戸時代で、100品種を越えたといわれています。

この地方の野生種は、雑木林などの雪の下で芽を伸ばし、雪が解けて早春の太陽の光を受けると、一気に光沢の強い黄金色の花を開きます。開花は3月下旬頃から始まり、雪が解け終わるまで続きます。また、朝開いた花は夕方には閉じますが、これが1カ月ほど繰り返されます。開花とともに徐々に茎と葉が伸長し、草丈は15~25センチになり、葉は細かく切れ込み、ニンジンの葉に似てきます。花の大きさは約3センチで、花弁は10~15枚、金平糖状の果実を付けます。雪国の春を彩ったフクジュソウも、樹木が若葉を広げ、日差しが強くなる頃には葉が黄ばみ始め、やがて地上部は姿を消し、地下の根茎で翌春を待ちます。

以前この花はよく見かけられましたが、生育地が狭まったことや個体数の減少で、県の絶滅危惧種に指定されています。幸いなことに田山地区の矢神岳山麓では、今も広い範囲でたくさんのフクジュソウが咲き誇っていますが、常緑針葉樹林の発達や低木類の繁茂が生育の妨げになっているようです。

地方によってフクジュソウは「土マンサク」と言い、マンサクを「木マンサク」と呼んで区別し、これらの花が一斉に、早く咲くと、その年は豊年満作になるといわれていました。

(文・八幡平市文化財保護審議会委員 八幡輝夫)

《参考文献》岩手の自然をたずねて(菅原亀悦編著、1983年・第一法規)、

いわてレッドデータブック-岩手県の希少な野生生物(岩手県生活環境部自然保護課編集、2001年・岩手県)

編集後記

数年前から荒屋地区で取り組んでいる雪だるまづくり。今年も地区内のあちこちに登場しました。アニメキャラクターや彫刻家の芸術作品のようなもの、巨大サイズから普通サイズまで思わずニコツとしてしまう作品ばかり。機会があったらぜひ見て欲しいです。でも、この広報が発行される頃には解けてしまっているかも。雪だるまにとっては寒い方がよいのでしようが、やっぱり暖かい春が待ち遠しいです。(齋藤)

2月12日の三ヶ田礼一杯市ジュニアスキー選手権大会は、今シーズン取材したスキー大会で、一番の悪天候でした。参加した選手はもろろん、応援に訪れた人や競技役員の方皆さん、お疲れ様でした。吹雪で前が見えない中、泣きながらゴールに向かう子どもたちとそれに声援を送る家族の姿を見て、このような地域の盛り上がりから、今回特集した小林君や土屋さんのような選手が生まれるんだと改めて思いました。(北口)